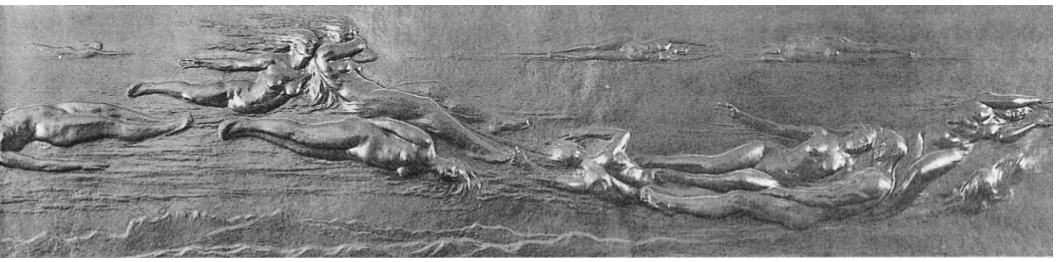
ISSN　0582−4478

京都大学図書館機構報



静脩

2011年2月

The Kyoto University Library Network Bulletin　Vol. 47.　No. 3

静脩企画　利用者座談会

「留学生からみた京大図書館」

日時：2011年1月19日(水) 14：30−16：30
場所：附属図書館小会議室１

図書館：本誌47巻１号では日本人の学部生・院生の方と座談会をして図書館に対する多くの意見を出していただきました。今回は留学生の方にいろいろ意見をうかがいたいと思います。よろしくお願いします。

【参加者のプロフィール】

図：自己紹介をお願いします。

A：中国から来ました。今は法学研究科の修士１回生です。

B：私も中国からの留学生です。所属は農学研究科でＭ１です。

C：私はペルー出身で、地球環境学堂の修士２回生です。

D：フランスから来ました。今は人間環境学研究科で博士の１回生です。また、人環・総人図書館でオフィスアシスタントをさせていただいております。

E：経済学研究科修士課程２年です。中国から来ました。

F：オランダから来ました。今は教育学研究科の博士課程です。

G：韓国から来ました。文学研究科のＭ１です。日本古代史を専攻しています。

H：ベトナムから来ました、理学研究科のＭ１です。今は物理学を専攻しています。

J：インドネシアから参りました。工学研究科の博士課程です。

【京大図書館をはじめて使った時は】

図：京大に来られて初めて図書館を使った時のことをお聞かせください。みなさん方は図

書館の使い方を誰から教わりましたか？研究室の先輩や、それとも同じ留学生でしょうか。

D：説明会を附属図書館で受けました。それが結構勉強になりました。あとは、KULINEなどの使い方をメディアセンターで教えてもらいました。

C：同じ研究室の先輩からです。附属図書館と学部図書室の両方の使い方をペルー人の先輩から教えてもらいました。

J：一年目は、情報がほとんどなくてあまり利用しなかったのですが、二年目からは研究室の友達に教えてもらったり、自分でウェブサイトを探したりして、結構利用するようになりました。一番よく利用したのが、東南アジア研究所の図書室です。ちょうど私の研究はインドネシアのことですので、あちらに本が多いのです。時々附属図書館も利用しています。

B：私の場合は、研究生だった一年ほど前、大学院の入試のとき受験生同士で教えあって、最初は24時間の自習室を利用していました。ほぼ毎日自習室を利用して、こちらの図書館のほうにも入って、本を探したりもしました。

H：附属図書館にカードを作りに来た時は他の図書館のことは知らなかったけど研究室の先輩とWebサイトから情報を得ました。

図：だいたい先輩や友達、同じ国出身の方からということが多いのですね。

G：私は自分で。ただ、文学部図書室しか利用していません。あまり専門書がない附属図書館には来る必要がありません。

【出身国の大学図書館との違いは？】

図：京都大学の図書館はご自分の国の大学図書館と比べて、同じなのか違っているのか、いかがでしょうか？

G：日本の方が不便です。

図：どのあたりが不便と感じますか？

G：図書館を利用するためには登録が必要ですよね。韓国では必要ありません。学生証を持っていったらどこにでも入れて、どこでもコピーができます。図書館の数は韓国のほうが少ないですが、中央図書館には他の学部の図書館に行かなくてもいいように専門図書がすべて集められています。学部の本は中央図書館にありますし、中央図書館にない本は学部の図書館にもありません。また、貸出の方法も違います。一般書は普通に使えますが、個人が触れない貴重な本の場合は、職員が直接探して持ってきてくれます。学生は自分ではやりません。とにかく京大は図書館利用登録やメディアセンターのID発行手続きなど、初めて利用するときが不便です。韓国は入学式のときに住所を登録して学生証をもらったらそれで手続きが終了します。

D：でも逆に、ひとつの図書館で登録したらすべての図書館が使えるのは助かります。私が通っていたのはフランスでも特殊な大学で、パリのあちこちにキャンパスや図書館があって、毎回登録しないと利用できませんでした。最近ひとつの場所に集中化する予定になっているようですけど。京都大学は、例えば私はふだん吉田南にいますが、理学部に本を借りにいっても登録はすでにしてあるので便利です。また、私のフランスの大学では学生は書庫に入れませんでした。出納に30分はかかり、使いにくくて大変でした。そのときは図書館は嫌いだと思っていました。博士論文を閲覧するだけで、また違う場所に行かなければならず、しかもそこは週3回、午後2時から5時までしか開いていなかったりすることもあります。予算的な問題もあったのかもしれませんが、利用者にとっては大変不便でした。

図：フランスの大学はすべてそうなのですか？

D：いえ、自分の大学は、です。お金がなくてキャンパスがいろんなところにあって、図書館もいろんなところにありました。京大も歩く必要がありますが、キャンパスがきれい

だし、そこまで遠くありませんし、Webで開館時刻が見られて使いやすいです。それにスタッフもいつも案内してくれるのですごく助かります。満足しています。

J：オンラインデータベースがあるので便利です。7,8年前のインドネシアの自分の大学ではデータベースがなくて紙の目録だったのですが、探しにくくて、しかもいいタイトルを見つけてもその本がないということがよくあり、大変使いにくかったです。京大では家や研究室からも調べられるし、図書館に来ても探しやすいし便利だと思います。

B：去年大学院受験のために図書館に行ったのですが、受験のために必要な本が全くありませんでした。友達も今度大学院を受験するつもりなのですが、受験勉強に必要な結構高価な本を、最初は借りるつもりだったのですが図書館にないので、買わなくてはいけませんでした。必要な本がなければ図書館の意味がないのではないでしょうか？もっと研究生のために受験に必要な科目の本を増やして欲しいなと思います。

図：それはご所属の図書室ですか？それとも附属図書館？

B：どちらでもです。

図：大体どの図書館でも学生希望図書の購入申込みを受付けていますので、遠慮なくカウンターの職員にたずねてください。

【教科書の購入と図書館－各国事情－】

D：シラバス掲載図書は購入していますか？教員から教科書のお知らせが来たりするのでしょうか。

図：附属図書館では、教科書は生協の販売リストから購入しています。シラバスに掲載されている図書は購入していますが、授業中に先生が紹介された本については把握できないため購入していません。ただし、教科書は１部しか購入していません。授業のために借りたい方には対応していません。タイでは受講する学生全員分の教科書を図書館が揃えているというのを聞いたことがありますが、みなさんの国の大学ではどうでしょうか？

H：ベトナムではそうでした。教科書が全学生分あるので、学生は購入する必要がありません。

B：共通科目の教科書とか、英語の資料がもっとあればよいと思います。

D：よく使われている本を購入するために、本の貸出や予約状況の調査はやっていますか？

図：附属図書館では、利用の多いものは２年前から複本を購入しています。まずは利用の多い本について１冊複本を購入し、今後は統計を取って増やしていくつもりです。ただ、試験問題集など受験専用の図書は買わないという方針があります。そうでない本なら買える可能性がありますので、必要なときは購入希望を出してください。

D：読みたい本を他の人が借りている場合には、購入希望ではなく、予約制があるから予約すればいい、とすすめてあげたらいいと思います。

【図書館の施設など】

G：文学研究科図書室で無線LANの使えるところはありますか？

図：東館の雑誌閲覧室でのみ使えます。

G：韓国の場合は学内全体で無線LANができ

ます。だから例えばiPadで検索したら、請求記号を紙にメモをせずにそのままiPadを見て探すのですが、それが京大では無線LANが整備されていないためにできないのですよね。瞬間的にインターネットで調べたいと思っても、文学研究科の図書館にある端末ではKULINEしか検索できないようになっています。コピー機も外にあってその都度出たり入ったりしないといけないので不便です。ただ、貸出期間が2カ月なのはよいと思います。韓国の場合は学部生が20日間、院生が1カ月間、教授は無期限に貸出ができます。

D：自分が借りている本に他の人から予約が掛けられた場合、貸出期間の延長はできますか？

図：できません。

C：便利だと思うのは、私の研究室はいっぱい本を買っているのです。図書館で買って、自分の研究室においてあります。一番良く使う本が自分の近くにあるので便利です。ペルーでは全部図書館に集めてあるので。それと、英語の本がたくさん置いてあって、自分は日本語をあまり読めないので助かります。

A：附属図書館は本が多いし雰囲気もいいのですが、設備については不便なところがあります。まず、本を読みながらPCを使うことが多いので、電源コンセントをもっと増やしてほしいです。それから、ノートPCをそのまま置いておくのは不安なので外に出るときに持ち出しているのですが、それがとても不便ですのでロッカーを作ってほしいです。あとは個人的な好みなのですが、閲覧机で他人と向かい合って座る時は落ち着きませんので、向かい合わせでない席が多いと助かります。

G：個別の席か大きな閲覧机かは人によって好みがあると思います。韓国の場合は両方あります。でも、広いデスクにもコンセントが付いています。だからノートパソコンを持っていけばどこでも作業が出来るようになっています。

D：今はパソコンが私たちにとって命なので、無線LANと電源は図書館内どこでも繋がるのが望ましいです。この21世紀の時代には電波と電気。新幹線でも席にコンセントがあって無線LANが使えます。

F：僕の場合、PCは持ち歩かないので、そういう面ではあまり不便を感じたことはありません。前の号を読んだのですが、日本人が不便に感じたことは理にかなっています。カードを忘れたときは入館手続きなしでも返却できるように、とか館内にコピー機があったほうがいい、とか。でも自分ではあまり不便に思っていません。図書館に来て本を借りて、読んで、読み終わったら返して、で満足しています。

【留学生ツアー、ガイダンス、講習会等】

図：附属図書館では留学生ツアー、ガイダンス、講習会をやっていますが、皆さんご存知ですか？

G：最初はガイダンスの存在すらよく知りませんでした。研究生のとき、文学部ではガイダンスは2回しかなくて、利用案内しかありませんでした。入学して初めてガイダンスを知りました。入学のときのガイダンスでは倫理の話とかいろいろありましたが、大学には勉強に来たのだから図書館のことが一番大事だと思います。もっと図書館についてやってほしかったです。

図：図書館ではいろんな利用案内やお知らせを作っていますが、ご意見をお聞かせください。

E：よく見ています。カレンダーもあって便利だと思います。

図：宣伝が行き届いている、と思う方は？

OECDデータ活用講習会の様子
（附属図書館講習会室2011年1月）

（留学生の４人が挙手）

図：前回の座談会では、三角柱やポスターなどを使ってもっと宣伝したほうがいいとのご意見を頂きました。みなさまからも何か具体的なアイデアがあればお願いします。

G：学科の掲示板はよく見ています。

J：工学部の場合は掲示板を見ない学生が多くて、メーリングリストベースで情報が提供されます。メーリングリストで提供したほうがよいと思います。

B：メールは個人向けなのでお知らせはあまり見ません。農学部は留学生向けの掲示板があるのでそこを毎日チェックしています。

図：お知らせの英語版があればいいですか？

J：日英併記がいいです。

F：ツアーも英語でやっていますか？

図：はい。やっています。

F：レファレンスガイドやパンフレットをもらっています。必要になった時点でそれらを使っています。講習会に行く時間はないですし、ガイダンスだと聞く必要のない内容も含まれていますから。

E：京都大学は貴重書をたくさんもっていますよね。ガイダンスなどのときは利用方法の説明以外にも、そういうおもしろいものを紹介してもらえるとよいし、興味を持ってもらえると思います。経済は『国富論』（原著 初版）とか持っていますよ！

【学内資料の取り寄せ】

G：他の図書館の本を自分の使いやすい図書室まで取り寄せて貸出してもらえますか？

図：地理的に離れた地区からは取り寄せできますが、同じ地区内ではできません。（吉田地区の南北キャンパス間は可）

J：今、桂キャンパスにいるのですが、吉田にあるほかの本を借りようとしたときに、直接出向かなくてはいけないといわれました。返却はできたのですが。

図：現在は取り寄せできるはずです。ただし、他の大学に依頼する場合は有料です。

【図書館はもっと院生を活用するべき】

D：目録の電子化は、院生の協力があれば速くなると思います。私のフランスの大学では世界でもあまり勉強されていない言語の本があって、その言葉ができる人が少ないので、図書館の職員は学部生にバイトの形で協力を得ています。私も２年間バイトしていました。現在は人環・総人図書館でオフィスアシスタントをしていますが、たまに聞かれることはあっても仕事として目録はとっていません。でもそういう仕事ができて目録の勉強もできれば、お互いにとっていい経験になると思います。

J：東南アジア研究所で、２年ぐらいバイトでインドネシア語の入力をしていました。ベトナム語、タイ語などは院生などにバイトを頼んで入力しているようですね。

D：自分もヨーロッパの言語がいくつかできるので、協力できたらいいなと思います。

図：今後の業務を考える上で参考になります。機会があればお願いすることがあるかもしれません。

【貴重図書の電子化と利用】

D：貴重図書の電子化のことですが、自分は早稲田大学の古典籍総合データベースをよく使っています。京都大学でも貴重資料画像でたまに見つかりますが、貴重図書の電子化をもっと積極的にしてほしいと思います。原物アクセスが難しいし、だんだんと状態も悪くなっていきますから。

図：そんなに量は多くないのですが、毎年進めてはいます。あと、資料を修復する時に同時に電子化を行っています。

D：利用者からすると、まず貴重図書を見るには手続きがいろいろ必要です。そして、見ることができても貴重図書はコピーができない。そのかわりに印刷してもらえるが料金が高い。自分では写真が撮れない。マイクロフィルムから印刷して見ることができますが、USB に画像を保存することはできません。なぜできないのですか？コピーできないのなら、江戸時代の蘭学者みたいに書き写さなければなりません。写すことで確かに勉強になることもありますが、電子化されないかぎりは福沢諭吉以上には勉強できないです。

図：本学の貴重書の取り扱い規程に沿って運用しています。

G：日本では電子化を大学がやっていますよね。韓国の場合は国立中央図書館が 1915 年以前のものは全部電子化していて、どこからでもアクセスできて印刷ができます。論文の場合は会社側がやって、その会社のサーバに連結して提供しています。国内の IP ではタダで印刷できるようになっています。古典籍の電子化も京都大学だけでやるのではなくて共同でやればよいのではないですか？

D：フランスの国立図書館は電子化をすすめていますが、フランスの Web サイトよりも早稲田大学の方が（内容は違いますが）使いやすいです。フランスではたくさん電子化されていますが探しにくい。私は日本の国会図書館の電子資料はそんなに使っていないのですが、どこかの電子図書館を参考にしようとするのなら、やはり早稲田のものがいいと思います。

E：中国でも早稲田の古典籍データベースにアクセスしました。大変便利です。

D：京大でもせっかくいい資料があるので、それを電子化してもらいたいです。

G：東大には史料編纂所がありますが、京大でも同様の事業をやってほしいです。特に近世以前の史料は京都が圧倒的に多いですから。

D：文科省から支援してもらえないのですかね?

【学習室 24 と自国の自習スペース】

図：学習室 24 みたいな場所がみなさんのお国にもありますか？また、京大の学習室 24 は使ったことがありますか？

E：中国の大学では教室の施錠はしません。夜の 11 時ぐらいまでは教室に入れますので自習には便利です。警備員はいますが常駐はしていません。

B：教室での自習はできるが、図書室は早く閉まります。

A：試験期間中のみ図書館が 24 時間開館しています。

H：ベトナムでは教室は 24 時間開いています。京大の 24 時間学習室はいつも混んでいます。人は少ないのに、鞄を置いて席取りされていますから、一回行っただけでもう行っ

ていません。

G：韓国では学校によって違いはありますが、図書館が管理する 24 時間自習室と学部が管理する自習室とがあります。貴重なものがない建物は 24 時間開いていて、それ以外は時間の制限があります。試験期間中はプロジェクターなどの機器がないところなどは開放されています。席取りする人が出てくるので、図書館が管理する自習室ではシステムで座席を予約するようになっていますし、3 時間ごとに更新しないといけません。自習室には学部生専用 1000 席と大学院生専用とが別にあります。それでも試験期間中には列を作ってみんな待っています。

F：オランダでは 24 時間学習室があっても誰も使わないと思います。

J：インドネシアでは、以前はなかったですね。今はどうなっているかは分かりません。

【MyKULINE への要望】

図：MyKULINE への要望はありますか？

H：延長できない場合、エラーメッセージが 1 つしか表示されません。エラー内容は違うのにメッセージが複数出ないので、更新できない理由がわかりません。

図：システムの問題で、今すぐには改善が難しいですが、検討します。

J：便利なのですが、自分の周囲の留学生はあまり使っていません。もっと広報したほうがいいと思います。

図：本日は多くの貴重な意見を出していただきありがとうございました。改善できた点は、のちの静脩誌面で報告させていただきます。

ー図書館のココを改善しました！ー

第 47 巻第 1 号で企画した利用者座談会（平成 22 年 5 月 19 日実施）のご意見から

【附属図書館】

□学習室 24 の利用時間を延長：試験期の土日祝日のみ（本年度前期試験から）

□学習室 24 の席取り防止：混雑期には職員が定期的にチェックし利用のない席の荷物を別置

□学習室 24 の臭気対策：空気衛生除菌機を設置

□レファレンス担当をわかりやすくした：カウンター前に目印となる案内看板を設置

【理学部・農学部】

□北部地区の SciFinder 講習会の広報に「三角柱」を使用

【農学部・東南アジア研究センター】

□２部局に分散していた雑誌（２種）を農学部に「集中」して配架

----- 図書館では、みなさまからのご意見をもとに、可能なところから改善してまいります -----

平成22年度　京都大学図書館機構第１回講演会

「iPadが図書館を変える？～これからの出版、教育、大学図書館～」

日時：平成22年10月19日（火）13：10～17：00
場所：京都大学附属図書館ライブラリホール（３階）

京都大学図書館機構では、出版界、大学、大学図書館における最近の潮流をふまえ、iPadに象徴されるデジタル時代の進展とその課題について講演会を企画・実施しました。当日は学内外から計112名が参加し、講演の様子はUstreamにて同時公開しました。

京都大学オープンコースウェア（OCW）にて公開中
URL:http://ocw.kyoto-u.ac.jp/library-network/02

講演１：変貌する電子図書館：１９８５～２０１０年を総括する

夙川学院短期大学准教授　湯浅 俊彦

2010年5月21日に新聞報道された「iPadに文芸新刊」という記事は、国内大手出版社が新刊の文芸書を電子書籍端末用に初めて売り出したという点で注目されるが、かつての「防衛のための文庫」発刊と同様、電子書籍にも防衛としての前史が存在する。しかし、最も電子書籍化の流れを加速させたのはGoogle「ブック検索」訴訟和解案の公表であろう。この問題により出版社は自社「編集部」編などの著作物以外はステークホルダーでないことが明白となり、権利ビジネスの空洞化が白日の下にさらされた。おりしも、各社の出版販売額は長期にわたって低迷を続けており、販売不振や広告モデルの変化に対応するためデジタル雑誌への取り組みを急速に展開し始めている。また、

国立国会図書館における所蔵資料の大規模デジタル化の実施や、納本制度審議会によるオンライン資料の収集に関する答申が追い討ちとなり、出版業界は更なる意識改革を迫られている。

そもそも、電子書籍とはいかなるものであろうか。「電子書籍」には他に「ｅブック」、「e-book」、「電子ブック」、「電子本」、「オンライン本」、「デジタル書籍」など様々な呼称があり、その上、デジタル化されたコンテンツには書籍や雑誌という区分や、１冊

2冊という数え方、出版社、取次、書店といった従来の流通経路が有効ではなく、電子書籍の定義をさらに困難たらしめている。既にインターネット経由だけでなくデータ放送によっても電子書籍を利用できる総務省の「書デジ」計画が動き出しているにも関わらず、現時点でさえ電子書籍の出版統計は正確な数値を出せずにいるのである。

日本における電子出版の歴史は、まず、デバイスありきであった。ハードメーカーがデバイス開発後、出版社がコンソーシアムを結成してコンテンツを提供したが、タイトル数は極めて少なかった。そのうちデバイスがユーザーに支持されなくなり生産が終了、それとともに電子書籍配信サービスも停止、ということを繰り返し、業界からは「何度も来る“電子書籍元年”」と揶揄されてきた。一方、海外では2007年に大量のコンテンツと共にAmazon社がデータ通信機能を備えた「Kindle」を発売し、2009年に後継機「Kindle2」を発売した際は23万タイトル、2010年1月には41万タイトルが提供されている。2010年にはApple社が音楽ダウンロードサービス「iTunes」の電子書籍版である「iBookStore」と、そのデバイスでもあるタブレット型端末「iPad」の発売を開始した。時を同じくして米Googleが「Kindle」、「iPad」、パソコンなどで読める電子書籍サービス「グーグル・エディション」の開始を発表し、ビジネスモデルは「電子出版」から巨大な「出版コンテンツ・データベース」の時代へと転換する兆しを見せている。

2010年は電子出版をめぐる業界の利害調整が進み、さまざまな団体・協議会・懇談会が設立された年でもある。各団体の利害は顕在化し、対立構造が浮き彫りとなった。それに先立ち、2008年以降から長尾真氏は「長尾構想」と呼ばれる「公共図書館の新しいビジネスモデル」を提唱し、著作者や出版社が受け入れられるビジネスモデル作りを前提に、国立国会図書館がデジタルアーカイブを維持し利用に供するという考えを打ち出している。この打開策とも言うべき構想はなかなか普及していないが、「グーグル・エディション」よりも公共性、透明性が高いと言えるのではないだろうか。

講演会場と参加者（ライブラリホール）

最後に、2010年10月8日に国立国会図書館関西館にておこなわれた、OCLC副社長ジェームズ・ミハルコ氏の「デジタル環境下における米国の図書館の最新事情・将来計画とOCLCの活動」と題する講演は非常にショッキングなものであった。米国では電子書籍への転換が急速に進み、学術図書館もより広範囲な価値を提供するよう変貌してゆくと予想される。他方、紀伊國屋書店「NetLibrary」の和書コンテンツが2010年6月現在56社1,639タイトルであるなど、日本の出版界で提供されている電子書籍のコンテンツ数は極端に少なく、このままでは一般利用の普及はもとより、大学図書館への普及も困難であると言わざるを得ない。今は利用者のためにどのようにコンテンツを提供するのが最適か、業種を超えて協同する段階にきているのではないだろうか。

（ゆあさ　としひこ）

講演２：新時代のモバイル端末による大学教育支援について

京都大学情報学研究科 准教授／京都大学
情報学研究科附属情報教育推進センター
副センター長　中村 聡史

1. 検索にまつわる研究の紹介

人間の記憶や意図はかなり曖昧であり、覚え間違った検索語をそのまま使用したり、検索の需要が曖昧なまま検索をしていることが多い。このような場面で検索行動をサポートするシステムの開発を行っている。Google の検索結果に表示される語を利用者が追加・除去することで検索の意図を先鋭化させる「Rerank.jp」、Google だけでなく KULINE や Amazon といった多様な検索システムの結果を特定の条件で並び替えることができる Firefox アドオン（拡張機能）「Rerank Everything」などである。またこれとは逆に検索語と関連する語にまで拡大して検索する「緩めてサーチ」、検索語と関連するオノマトペを提案する「オノマトペロリ」等、「足す」「減らす」を提案することでユーザーの検索行動をサポートする数々のシステムの開発を行ってきた。この他インターネット動画への実況コメントを集積して（動画の）ダイジェストを作成する「ソーシャルアノテーション」の活用や、ソーシャルブックマークを利用した検索結果再ランキングなども開発している。こういった技術は図書館における検索行動のサポートやお薦め本の選定などに活用できるのではないか。多くの研究者がこの分野で研究を行っているので他にも図書館サービスに結びつくものがあると思われる。

2. iTouchLecture：情報教育推進センターと次世代のモバイル講義視聴システム

情報教育推進センターは IT と情報社会制度・ビジネスに関する知識を有しイノベーションに貢献する人材を育成するための大学・大学院レベルの全学情報教育プログラムの研究・策定と実施を行っている。講義提供対象が大学院学生ということから突発的に講義に出席できなくなることもあり、モバイル環境での講義視聴・空き時間の活用を進めている。OCW（京都大学オープンウェア）など他の研究成果のアーカイブも進められてはいるが、利用環境がデスクトップに限定されていることが多いため利活用が進んでいない部分もある。モバイル環境で視聴できれば通学時間など隙間学習に利用しやすい。また、「86（ハチロク）世代」と呼ばれる若い世代を中心に携帯電話で動画視聴する比率が高いこともモバイル機器使用を後押しすると考えられる。在校生だけでなく将来の学生、生涯学習向けにも活用の可能性がある。また講義コンテンツのアーカイブ自体は講師側にとっても授業改善の機会となり得る。

まず端末（iPod touch）の大きさに合わせてスライドのサイズやインタラクションを工夫する、具体的にはスライドと動画を分離し、同期させるシステムの開発等を行

った。これにより視聴者自身がスライドと動画とを自由に切り替えたり、拡大して見ることができる。また、後で見たい箇所をブックマークしたり、アノテーション（注釈、書き込み）をしたり、それらを共有することもできる。受講者のアノテーションは講師へのフィードバックともなりうるし、講師側からのアノテーションはスライド修正や補足として利用できる。iPad 向けシステムも開発している。

実際の運用は、提供側で講義収録・編集・ファイル変換を経てコンテンツをサーバにアップロード（著作権処理等の課題も残っているため現在は学内限定）、貸出用端末（iPod touch）にプログラムをインストールの上希望者に貸出（受講者が私有している端末へのインストールも提供）を行い、受講者側で各々コンテンツ＝視聴したい講義をダウンロードする、という流れになっている。コンテンツのサイズは 200 ～ 300MB とかなり大きいので大学などの無線 LAN 環境でダウンロードして後で利用することを想定していた。今後広く活用してもらうための認証システム開発、AppStore （Apple が運営するアプリケーションのダウンロードサービス）への登録を行う予定である。

運用開始後のアンケートでは「復習用に便利であった」、「興味はあるが登録していない講義の聴講ができた」、「紙の資料を持ち歩かなくてすんだ」「出席できなかった講義内容を視聴できた」など好評であった。逆にアップロードまでの時間短縮、ダウンロード時のトラブル（ネットワーク環境によるもの、学生側のリテラシーによるもの等）など改善を要する点も浮き彫りになった。ネットワーク環境や、大学近隣に居住する学生が多いという京都大学特有の事情のためか当初想定していた移動時間中の隙間学習は意外に少なかった。

今後は新時代の情報教育手法として京大方式を広めていくというセンターのミッションに基づき、コンテンツ記述言語（iContent.XML）の仕様公開、プログラム（iTouchLecture）そのものの無料公開、iPhone / iPad 以外のスマートフォン全般への展開も検討している。企業でもこういったシステム・コンテンツの開発はしているが、研究・開発・改良を一元的に行うことができ、また運用へのきめ細かな対応ができる大学発ならではのメリットもある。他大学では出席管理や講義サポート、モバイル端末上でのプログラミング教育などにも活用例もある。利用者教育のモバイルコンテンツ化や、クラウドを利用した電子教科書提供など、図書館においても様々なサービス展開が考えられるのではないか。

（なかむら　さとし）

参加者の質問に回答する講師

講演３：これからも「図書館が必要」と思ってもらうための挑戦：これからの大学図書館の役割・将来像について

慶應義塾大学メディアセンター　入江 伸

慶應義塾大学メディアセンターでは、2010年末より出版社やシステム担当企業等の協力を得て、日本語の学術書籍をデジタル化し特定利用者へ提供を行う電子学術書利用実験プロジェクトを開始した。

１．大学図書館が実験プロジェクトを行うに至った背景について

大学図書館の扱う対象が、紙媒体から電子媒体へと移行する時代に図書館はどうしていけばいいのか、図書館が社会の中で生き残っていけるかについて話をしたい。

巨大隕石が落ちてから（インターネットが開始されてから)、図書館の社会的役割も変わっていかざるを得なくなっている。例えば紙という媒体だけを扱っていた時代は、図書館は「予算」「場所（閲覧空間)」「スキル」などの基盤に加え「権限（著作権を制限できる)」を持っていたが、電子媒体の時代に関しては何の権限もなく、基盤も増える見込みがない。現在は紙媒体と電子媒体が併存するハイブリッドの時代だが、紙媒体も電子媒体も両方管理することがはたして可能なのだろうか。ハイブリッドとは、デジタル完全移行のための一時的過程にすぎないと考えられるので、将来的には、図書館モデルのシフトが必要となる。

デジタル化へ向かう中で、サービスの中核が本格的に変わると予想されるが、デジタル化時代においても残る教育研究支援という目的に関しては、いろいろな機関と連携を進める必要がある。社会から孤立して図書館の中だけで完結していると、社会の変化に継続的に対応していくことができなくなる。社会の情報生産や流通に図書館を位置づけ、他の機関との連携によって図書館の可能性を広げる試みが必要である。

２．図書館が全文検索システムをマネジメントするための問題点について

これから大学図書館が「Google　Books」のような全文検索サービスを行うための評価として、10万冊に相当する目録データと全文データを実際に用いた実証実験を行った。全文検索のような巨大なデータを対象として効率的にナビゲートしていくためには、メタデータの単位や従来図書館が重視してこなかった言語コード、出版国コード、出版年などのコード系、資料の内容を表す件名が重要になってくることが議論された。また、10万冊の全文画像データは、これまで図書館が管理してきた目録データと比べて巨大であるため、今後はこれまでのスキルの中で図書館が管理していくことは難しいと思われる。またこれからの図書館マネジメント上で大きな問題は、紙時代の習慣や文化から電子媒体へ向けて重点を変えていくことであり、今年のシステムリプレー

スではマネジメントコストを電子媒体へ移行させることを目標として行われた。

３．実験プロジェクトについて

現在、大学図書館がサービスしている電子資源は、圧倒的に英語のコンテンツが多く、日本語、特に学習用資料が極めて少ない状況である。また、貸出実績を調査すると新刊書だけでなく古い年代の資料もよく利用されていることがわかる。図書館で電子書籍をサービスする場合、古い年代も対象とすることが重要となる。このような大学図書館（利用者）のニーズが出版社の理解を得て、新しい商品やビジネスモデルが考案されることを望んでいる。そのため、書店が販売する商品を図書館が購買するだけという従来のスタイルではなく、学生のために学生が求めている利用環境の開発を図書館と出版社とのコラボレーションによって進めたいと思っている。

また、この実験では、iPad、Android 端末、PC を使ったマルチデバイスを使った実用性や操作性の評価も行う。

（いりえ　しん）

【質疑応答】

質問者 A：大学が自発的に教材を作成・出版することの可能性についてお尋ねしたい。

中村講師：図書館が電子書籍系にどこまで参入できるかについては、現在全く不明。大学としてはベンダーの見極めが重要。ベンダー任せにするのではなく、「大学図書館」という信頼性の高い機関によりコンテンツサービスが提供されることも視野に入れるべきか。

入江講師：直接的な回答にはならないが２点。

1 点目、今後は教員との関係も含め、これからの出版スタイルの可能性を従来とは違う方向から探りたい。2 点目、教科書は、その電子化により販売数への深刻な影響が予測されることから、実施したくない意向が出版社側にある。各々の利害を勘案して進めることが大きな課題。

質問者 B：プラットフォームが林立している現在、今後標準的なものがいかに確立されていくのか。また慶応大学では今回の実験で 2,000 冊試行されるというお話であったが、これらのサンプルを通して電子書籍の将来性をどのように捉えているかをご教示願いたい。

湯浅講師：プラットフォームの将来については誰も予想できない。この 10 年間に取次や物流管理が変化を余儀なくされ、代わって既存のメディア企業以外が台頭する可能性もある。どことどこが連携するかで、プラットフォームも大きく形を変えるであろう。NDL と Google は国内コンテンツの２大勢力であると思う。

中村講師：難しく、且つ興味深い問題。混沌としてはいるが、何かの兆しはあるはず。私たちも模索段階であるが、図書館職員としてみなさんに是非その「兆候」を捉えていただきたい。

入江講師：コンテンツ所有者の権利保障については出版社の意見が一致している。プラットフォームについても統一する方向性は当然ある。またサンプルの 2,000 冊という数字は「少ない」と思う。この企画は何年も前からあったが、コンテンツが集まるかどうかが懸案であった。結果としては、出版社他の協力を得ることができ、ある程度集まっている。現在はコンテンツ数をもっと増やす方向で出版社へ働きかけている。NDL の大規模電子化の例を挙げると、出版社に不利益をもたらさないで著作権クリアを解決する策はあるように思う。少しでも可能性があれば動くという姿勢なくしては、図書館の活路を見出すことは難しいのではないか。

＜大型コレクション紹介＞

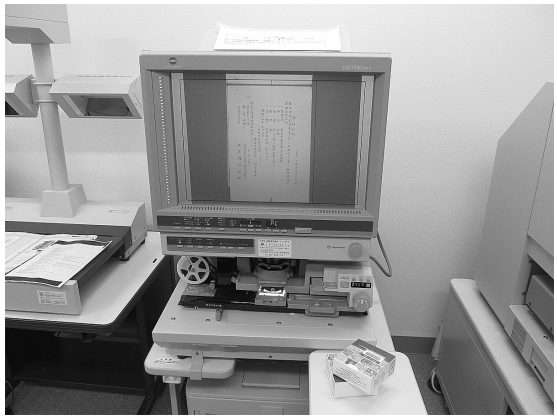
中国海関档案史料の収蔵によせて

経済学研究科教授　**堀　和生**

中国海関档案史料は、中国第二歴史档案館が所蔵する旧中国海関文書5,500ファイルを所収した一次史料集である。中国の税関である海関は、1854年から外国人の監督下におかれ、列強の権益が拡大するのと並行して、中国の政府機構のなかでも強大な組織へと発展した。その業務は、通関業務にとどまらず、港湾行政、沿岸河川の警備、さらには洋式学校の運営、郵便制度の創設にまでおよび、中国が西洋近代の文物と制度を導入する上で大きな役割を果たした。さらに、海関の長である歴代の外国人総税務司は、中国政府の外交補助を通じて、中国の外政・内政に強い影響力をもっていた。

外国人による海関支配は、1949年に人民共和国が成立するまで続いた。その約100年にわたる期間を通じて、海関は膨大な統計書、報告書、文書を作成している。そのうち貿易統計ならびに貿易報告はすでに復刻集の公刊が進展しているが、海関組織内部の一次文書はこれまで一部しか公刊されてなかった。中国海関档案史料は、一次文書のなかでも、海関幹部のみが閲覧することができた最重要書類を厳選し、全期間を通して集録している。中国近現代史上に大きな位置を占めた海関の業務全般を詳細に把握、検討するうえで欠くことができない基本史料である。

中国海関档案史料は、全7ユニット、377リールにおよぶ膨大な一次史料群である。その内容と利用上の価値の一端についておおまかに解説したい。ユニット1は、総税務司によって発行された7,000を超える通令を1949年に至る全期間を通して集録したものである。総税務司通令は、組織全体の方針、規則を定めたものであり、海関の基幹文書をなす。その内容は、各業務の手順、手続き、海関の組織制度、定期・不定期の事案への対応方法など、海関と税務司に関わるすべての事項について記されている。それは、組織内部の仕組みを詳細に知るための基本情報のみならず、海関が中国史上に占めた大きな位置を反映して、中国の内政・外政についての一次史料でもある。これまで通令は、ごく一部のみ公刊されていたにすぎないため、本史料集によってはじめてその全体を閲覧することができるようになった。



中国海関档案史料（マイクロフィルム）

ユニット2は、北京の総税務司と海関ロンドン事務所の間の1874年から1949年までの通信文書を収めている。ロンドン事務所は、中英間の非公式の外交窓口として機能し、中国と列強間の外交問題について多くの使命を果たした。史料には、公式通信

文だけでなく、準公式通信文、さらには機密通信文および個人書簡も集録されており、中国外交史上の重要史料となっている。

ユニット3は、北京の総税務司と地方の海関事務所との間の通信文・書簡集が収められている。海関は中国全土の40以上の主要都市に事務所を設置し、通関業務を執行していた。地方事務所からは、貿易統計と貿易報告が送られるだけでなく、各地方の事件、現地の中国人の反応や生活状況について、公式・非公式の文書および書簡が数多くやりとりされている。中国各地の社会状況を知る上で貴重な史料であると言えよう。本史料集では、19世紀の史料は義和団の乱による混乱で失われてしまったため、20世紀に入ってからの上海、漢口、汕頭、哈爾浜の主要4港の史料が収められている。

ユニット4と5は、海関による密輸の取り締まりに関する史料が収録されている。海関が作成した貿易統計は、あくまでも通関手続きを経た商品貿易を記録したものであり、その背後には統計に計上されない数多くの密輸が存在していた。ここに収められている史料は、このような統計では見えない商業流通の実勢の一端を記す貴重な情報である。このほかに、中国の中央政府、地方政府が設置した常関、釐金局と呼ばれる徴税機関についての記録も含まれている。1930年代になると、常関、釐金局は廃止され、海関に統一されてゆく。常関、釐金局についての史料は、統一以前の国内商業流通の実態についての貴重な情報である。

ユニット6と7は、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争、国共内戦期の海関業務の実態について記録した一次史料を収めている。「満洲国」の成立から太平洋戦争にかけて、日本の外交圧力、軍事侵略が中国の政治経済に与えた影響について、生々しい記録を数多く収録している。また、「満洲国」、汪精衛政権、さらには重慶国民政府それぞれの海関業務についての記録が収められているため、戦時下の中国の状況について、全国的な視野でみることができる貴重な史料である。国共内戦期については、国民政府が戦後直面した国民経済の再統合と復興に関する貿易行政面からの史料を数多く所収している。

このたび本学は、この史料集を国内ではじめてフルセットで収蔵した。本学には海関史料の収集の長い伝統がある。一連の膨大な海関史料のなかでも貿易統計ならびに貿易報告については、世界の学術研究機関の中でも指折りの収集数を誇っている。古くは、1920年代から同時代資料の収集をはじめている。太平洋戦争の勃発以後、その作業は中断されてしまっていたが、1970年代に入り世界各地で部分的に復刻集の公刊がはじまると、ほぼ欠くことなく収集を続けてきた。附属図書館には、ハーバード大学が復刻した中国海関刊行物集（Chinese Maritime Customs Publications）全100巻があり、経済学部図書室には、台湾国史館が復刻した『中華民国華洋貿易総冊』全83冊、そして中国第二歴史档案館が復刻した『中国旧海関史料』全170冊が収められている。今回、本学のコレクションの中に、新たに中国海関档案史料が加わり、刊行史料だけでなく一次史料の相当部分も所持することになった。海関研究、ひいては中国近現代史研究全般の飛躍的な発展を期待できるようになった。学内のみならず、日本内外からも多くの研究者に来ていただき、ともに本資料を利用して研究を進めていけるようになったことを、皆さんとともに喜びたい。

本資料は経済学部図書室に配架していますので、閲覧をご希望の方は直接おいで下さい。

（ほり　かずお）

＜一冊の本シリーズ 17＞

「モモ」と「老化するお金」

河邑厚徳＋グループ現代『エンデの遺言　根源からお金を問うこと』（NHK 出版、2000 年）

総合博物館准教授　**塩瀬　隆之**

「モモ」とは、児童文学作家ミヒャエル・エンデが創造し、世界中の子どもたちから長く愛されてきた少女の名前です。街の古い円形劇場に住む一人の少女は、ただじっと人の話に耳を傾けるだけで、その人たちに自分自身を取り戻させる不思議な力をもっていました。ある日、時間貯蓄銀行からやってきた灰色の男が、利子が利子を呼んで人生が何倍もの時間になるように時間を預けよと言葉巧みに人々をそそのかしました。余裕のない生活に追われ、人生の大切なものまで失ってしまいそうになる街の人々を助けようと、モモは灰色の男と対峙しようと立ち上がる物語です。

「少女」と「お金」とは、なんとも唐突な組み合わせのように聞こえるかも知れません。ましてや耳慣れない「老化するお金」という言葉。エンデの『モモ』は、働けど働けど物質的な豊かさとは裏腹に、かえって虚しさが募る現代社会を風刺していると評されます。しかし、エンデ自身は実はもっと深い問題意識を込めた作品であるとのべていました。これを指摘した最初の人がドイツの経済学者ヴェルナー・オンケンであり、『モモ』の中に現代の経済システム、すなわち「お金」に対する問題意識が込められていると指摘するのです。本稿で紹介する『エンデの遺言　根源からお金を問うこと』は、そのエンデが晩年にどうしても言っておきたかったこと、としてNHKのインタビューに答えたお金に関する問題点を指摘する内容をもとに編纂された本です。

実は私が事あるごとに人に薦めていた本は、『モモ』の方でした。子どもの頃から好きだったということもありますが、工学部での卒業研究で、モモみたいな聞き上手のロボットを作りたいと考えて研究をはじめたからでもあります。しゃべり上手なロボットを作るというのはそう難しくはないのですが、モモのように聞くだけで自分自身を取り戻させられるような聞き上手なロボットが本当に出来たら、どんなに素晴らしいだろうと考えたからです。しかし、この『エンデの遺言』に出会ってから『モモ』を読み返してみると、昨今の貨幣至上主義経済の破綻を予言していたかのような静かな警鐘が散りばめられていたのです。いまだからこそ手にとるべき良書として本書をお薦めしたいと考えました。

元来、お金とは労働の対価や生産物の対価として受け取り、それを使うという仕組みでした。しかし、お金の機能が多様化し、いまや交換だ

けではなく資産として貯めこまれ、投資対象にまでなってしまったことにエンデは大変な違和感を覚えたそうです。ハンス＝クリストフ・ビンスヴァンガーが指摘したように、利子が利子を呼んで増え続けるお金とは、まるで錬金術そのものであると。そもそも自然界に存在する物質のすべては有限であるはずで、唯一といってよい永遠不滅のもの、さらに（表面的には）それが増殖しているかのように見える貨幣システムへの疑念を深めていったのです。

エンデはお金に関するあらゆる研究者、有識者の著書を読み、ときに直接に意見交換をしました。とくに関心をもったのは、思想家シルビオ・ゲゼルです。「お金は老化しなければならない」、とゲゼルが提案した自由貨幣は、エントロピーの法則のごとくその価値が減じるお金、経済活動の最後には消え去ってしまうお金です。ゲゼル理論は、1932年、オーストリアのザルツブルグ近郊の小さな町ヴェルグルで実践されます。世界恐慌の中、財政破綻にみまわれた町長は、自らが信奉するゲゼル理論を実践し、ヴェルグル労働証明書という地域通貨を発行しました。マイナスの利子によって月ごとに価値が減っていくこの「老化するお金」は、次々と使わなければ価値が失われていきます。そのため、お金は貯めこまれることなく次々に街の中を動き、様々な価値との交換を繰り返して、街に活気を取り戻していったのです。しかしこの画期的な取り組みは、中央銀行の紙券発行独占権に抵触するとして中断され、財政破綻から完全雇用にまで回復しつつあったヴェルグルの経済は、わずか一年で失業率30%の悪状況へと転落していったのです。あれから80年近くが経とうとしている現代、未だに人々は永遠に価値が増え続けるという幻影を追い続けています。

エンデがこの警告を残したのは、15年以上も前にさかのぼります。にもかかわらず、わたしたちは未だに同じ問題に相対しているのです。エンデは現在の貨幣システムが第三世界と自然を犠牲にすることで成立しているにすぎないと指摘します。理性がそれを押しとどめようとしても、現実がそれを上回る力で元に戻してしまうのだと。子孫たちが同じ過ちを起こさないようにするのが、作家としての自分の使命であるとエンデは確信していたようです。そしてわたしたちが意識を変えさえすれば、お金そのものも変えることができるはずだと。

貨幣至上主義経済は物質的な豊かさと引き換えに、わたしたちの心の豊かさを奪っているかも知れません。世界中に張り巡らされた情報ネットワークは膨大な情報を集めてくるのと引き換えに、膨大な情報処理に日々の時間が奪われてかえって孤立を深めているかも知れません。貨幣システムであれ、情報システムであれ、社会のグローバル化が加速する一方で、大切なものが失われつつあることに薄々気づきながらも誰も歩みを止められない現代だからこそ、このエンデの言葉をわたしたちはしっかりと受け止めていきたいと思います。

（しおせ　たかゆき）

今回の一冊の本：

書　名：「根源からお金を問うこと」
編　者：河邑厚徳,グループ現代
ISBN：978−4−14−080496−4
出版者：日本放送出版協会
出版年：2000　　（本体1,500円+税）

■学内所蔵
附図　２F開架　DF/1/エ1
文　二十世紀　337/Ka/1
経済　１F開架図書　8/4-1/End
農生経　司書室　39366

地域研究統合情報センター図書室の紹介

【図書室の概要】

地域研究統合情報センター図書室は学内でも新しい図書室のひとつです。地域研究を行う研究組織の再編により2006年4月地域研究統合情報センターが京都大学に設置されたのに伴って、国立民族学博物館地域研究企画交流センター（同年3月廃止、以下民博地域研）の蔵書が移管され、2007年3月に開室しました。民博地域研は独自の図書室を持っていませんでしたので、大学の部局図書室として文字通り一からのスタートとなりました。当初は百万遍の総合研究2号館地階にありましたが、2008年12月に地域研究統合情報センターとともに川端通りに新築された稲盛財団記念館へ移転しました。現在はその1階にある共通資料室（117号室、東南アジア研究所と共用）の中に図書室カウンターと閲覧スペースが設けられ、スタッフ2名が常駐しています。共通資料室の両隣にマイクロ資料保管室（東南アジア研究所と共用）と書庫が配置されています。こうして徐々に環境も整備され、図書室の業務も本格的に軌道に乗ってきました。

蔵書冊数は約4万冊（マイクロフィルム約5,200リール、マイクロフィッシュ約2万枚を含む）、雑誌総タイトル数は541（うち洋雑誌469）、その他に映像資料約1,500点、光・磁気媒体資料約500点、地図約4,000枚を所蔵しています（いずれも2010年3月末の数字）。また、これらとは別に英国議会資料原本約12,000冊を「京セラ文庫『英国議会資料』」が附属図書館地階に配置されています。

【蔵書の特色と主要なコレクション】

蔵書は民博地域研において収集されたものが大半を占めています。中東・ラテンアメリカ・

地域研図書室（稲盛財団記念館117号室）

中央アジア地域に重点を置いて現地で収集された同時代的な資料や基本文献、世界の諸地域の近現代の諸問題を考察するために重要な米・英・旧ソ連などの外交・政治文書や国際関係分析資料、政治学や国際関係論の分野を中心とする欧文雑誌、希少価値のある地図や劇場映画のコレクションなどが含まれています。

図書室設置以降、学内の地域研究関連部局、特に東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科との連携を意識しながら、大型コレクションへの申請などにより蔵書の拡充を図り、特色ある蔵書形成をめざしているところです。

蔵書のうちで最大規模のコレクションは「京セラ文庫『英国議会資料』」です。これはかつて英国商務省が所蔵した、英国議会資料の原本で、現存するもののうちで最も欠本率が低いとされるコレクションです。1998年に京セラ株式会社から民博地域研に寄贈され、2000年に公開となった経緯がありますが、京都大学では2006年11月にあらためて同名の文庫として開設されました。さらに、2007

年度大型コレクションにより下院文書のウェブ版 House of Commons Parliamentary Papers を購入し、これによって下院文書については学内の PC 上でフリーワード検索と閲覧が可能となり、利便性が格段に向上しました。

世界の各地域の映像資料については、エジプト映画、タミル語映画、マレーシア地域映画、タイ映像資料など、ユニークなコレクションが形成されつつあります。

その他、旧日本植民地関連資料の復刻版、旧ソ連陸軍参謀本部作成地勢図（中東諸国、中央アジア諸国、ロシア）、20 世紀マレー語定期刊行物コレクション、ロシア革命期中央アジアの新聞、北朝鮮やアフガニスタンの新聞、現地との協働によって作成された希少資料のデジタル版など、日本において所蔵機関の少ない資料も少なからず所蔵されています。

2009 年には石井米雄京都大学名誉教授より個人蔵書のご寄贈を受けました。この整理に着手した矢先、たいへん残念なことに石井米雄先生はお亡くなりになられましたが、整理作業は現在も継続中で、公開の準備が進められています。

【図書室の活動と研究プロジェクトとの連動】

地域研究統合情報センターでは、地域研究資料の共有化や地域情報学の確立といった課題を設定した研究活動が行われており、その観点から所蔵資料を積極的に活用したプロジェクトが進行中です。先にご紹介した映像資料や地図については、その一部がすでにデータベース化され、公開されています。また、共同利用・共同研究拠点として展開している共同研究においても「CIAS 所蔵資料の活用」という枠が設けられ、ある資料群を対象として、特定のテーマを追究する研究やデータベース構築をめざした研究などが行われています。（詳しくはセンターのホームページをご覧ください。http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/）

小さな図書室ですが、地域研究分野の研究者だけでなく、より開かれた形で学生・大学院生の皆さんにもご利用いただけるよう努力していきたいと考えています。これまでは少々広報不足でしたが、近々にも図書室ホームページがリニューアルされ、所蔵資料についての解説や新着情報などがより充実したものになる予定ですので、ぜひご利用ください。

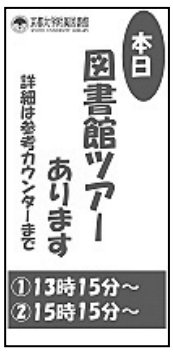
ご来室をお待ちしております！

地域研究統合情報センター図書室ホームページ
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/library/

（地域研究統合情報センター図書室）

附属図書館 オリエンテーション

■「知らなきゃ損！図書館活用法」
4月 4日（月）～ 8日（金）
11日（月）～15日（金）
■図書館ツアー：図書館施設案内
4月11日（月）～15日（金）
■スタンプラリー
4月 4日（月）～27日（水）



国民読書年　京都大学附属図書館　特別企画

「アカデミックに経済を読む：複眼的でグローバルな視点をどう獲得するか」報告

（開催期間：平成 22 年 11 月 10 日～ 29 日）

１．はじめに

平成 22（2010）年の国民読書年にあたり、附属図書館では、同 11 月に「アカデミックに経済を読む：複眼的でグローバルな視点をどう獲得するか」と題して、読書を推進する特別企画を開催した（平成 22 年 11 月 10 日～ 29 日）。本企画は、図書館を活用してどのような情報を得、いかにその情報を客観的に評価して行動すべきなのかについて考える機会をもつことを目的とし、次のように開催した。

２．行事内容等

〇就職セミナー（11/11）［参加者 47 名］

キャリアサポートセンター主催（附属図書館協賛）の就職セミナーでは、日本経済新聞社による「就活を成功させるための情報収集術」の講演の後、附属図書館から、「会社四季報、新聞をデータベースで読む」と題して、各種データベースの紹介を行った。

〇講演会・講習会（11/17）［参加者 26 名］

古賀崇准教授（附属図書館研究開発室）の挨拶のあと、「グローバル・ヒストリーの中の日本」と題して籠谷直人教授（人文科学研究所）が、16 世紀以降のアジア等に起源をもつ物産の交易経済の歴史について、政治や文化と関連づけて講演を行った。アンケートでは歴史分析や経済史研究の一端を知ることにより視野が拡がった等の意見があった。また、教員の研究に関する講演会と、図書館の資料とを関連させた企画に賛同する意見もあった。引き続き、第 2 部の講習会「文献収集講座 -経済を中心として-」を実施した。

〇講演会・講習会（11/25）［参加者 45 名］

古賀准教授の挨拶のあと、岡田知弘教授（図書館機構副機構長、公共政策大学院）の、「今をどうとらえるか －複眼的なリサーチ、読書法のススメ－」と題する講演が行われた。豊富なデータから、経済と地域、世界をとらえ直すとともに、大学生時代の学び・読書等について話があった。アンケートでは、データ収集の意義、エビデンスに基づく思考や古典からの学びの必要性等についての意見があった。第 2 部では講習会「データベースで日本 / 世界を読む」を実施した。

11 月 25 日　**岡田教授講演会**

〇ビブリオバトル（11/26）［参加者 26 名］

ビブリオバトルは、登壇者が推薦したい本を 5 分間で紹介し、聴衆が一番読みたい本を決める知的書評合戦である。ビブリオバトル普及委員会事務局と図書館員とが共同で開催し、ライブ配信も行った。

〇図書の展示（11/10 － 11/29）

附属図書館 1 階で、講演者が推薦した図書 69 冊の展示を行い、およそ半分が貸出された。

３．おわりに

図書館は本企画を通じて、グローバルな視点で複眼的に考えるアカデミックな読書の姿勢を伝え、情報と利用者をつなぐ役割を果すことができた。

講演者推薦図書リスト

（K:籠谷教授推薦, O:岡田教授推薦）

	書名 / 著編者名等
K1	世界経済の歴史 : グローバル経済史入門 / 金井雄一, 中西聡, 福澤直樹編. -- 名古屋大学出版会, 2010.
K2	現代インドネシア経済史論 : 輸出経済と農業問題 / 加納啓良著. -- 東京大学出版会 (発売), 2004.2.
K3	後発工業国の経済史 : キャッチアップ型工業化論 / アレクサンダー・ガーシェンクロン著 ; 絵所秀紀 [ほか] 訳. -- ミネルヴァ書房, 2005
K4	ヨーロッパの奇跡 : 環境・経済・地政の比較史 / E・L・ジョーンズ著 ; 安元稔, 脇村孝平訳. -- 名古屋大学出版会, 2000.9.
K5	大西洋革命の時代 / I. ウォーラーステイン [著] ; 川北稔訳. -- 名古屋大学出版会, 1997.
K6	重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集 / I. ウォーラーステイン [著] ; 川北稔訳. -- 名古屋大学出版会, 1993.
K7	近代世界システム : 農業資本主義と『ヨーロッパ世界経済』の成立 / I. ウォーラーステイン [著] ; 川北稔訳. -- 1,　-- 岩波書店, 2006.10.
K8	近代世界システム : 農業資本主義と『ヨーロッパ世界経済』の成立 / I. ウォーラーステイン [著] ; 川北稔訳. -- 2,　-- 岩波書店, 2006.10.
K9	日本流通史 / 石井寛治著. -- 有斐閣, 2003.
K10	幕末維新期 / 石井寛治, 原朗, 武田晴人編. -- 東京大学出版会, 2000.
K11	産業革命期 / 石井寛治, 原朗, 武田晴人編. -- 東京大学出版会, 2000.12.
K12	両大戦間期 / 石井寛治, 原朗, 武田晴人編. -- 東京大学出版会, 2002.12.
K13	戦時・戦後期 / 石井寛治, 原朗, 武田晴人編. -- 東京大学出版会, 2007.
K14	イギリス帝国経済史研究 / 山田秀雄著. -- ミネルヴァ書房, 2005.6.
K15	エネルギーと産業革命 : 連続性・偶然・変化 / E・A・リグリィ著 ; 近藤正臣訳. -- 同文舘出版, 1991.
K16	最初の近代経済 : オランダ経済の成功・失敗と持続力1500-1815 / J・ド・フリース, A・ファン・デァ・ワウデ著 ; 大西吉之, 杉浦未樹訳. -- 名古屋大学出版会, 2009.
K17	近世の市場構造と流通 / 林玲子著. -- 吉川弘文館, 2000.12.
K18	産業化と商家経営 : 米穀肥料商廣海家の近世・近代 / 石井寛治, 中西聡編. -- 名古屋大学出版会, 2006.2.
K19	近代日本とイギリス資本 : ジャーディン=マセソン商会を中心に / 石井寛治著. -- 東京大学出版会, 1984.6.
K20	近現代日本の新視点 : 経済史からのアプローチ / 中村政則編. -- 吉川弘文館, 2000.
K21	近代日本の経済発展 : 成長と構造的変化1868-1938 / William W. Lockwood著 ; 石川秀次郎訳. -- 日本図書刊行会, 2001.12.
K22	「帝国」の経済学 / 杉山伸也責任編集. -- 岩波書店, 2006.
K23	日本資本主義史論 / 大石嘉一郎著. -- 東京大学出版会, 1999.
K24	開発経済学 : 諸国民の貧困と富 / 速水佑次郎著. -- 新版. -- 創文社, 2000.
K25	南北アメリカ華民と近代中国 : 19世紀トランスナショナル・マイグレーション / 園田節子著. -- 東京大学出版会, 2009.
K26	アジアのなかの中世日本 / 村井章介著. -- 校倉書房, 1988.11.
K27	支配のしくみ / 藤井譲治編. -- 中央公論社, 1991.11.
K28	近代移行期の人口と歴史 / 速水融編著. -- ミネルヴァ書房, 2002.
K29	オランダ商館長の見た日本 : ティツィング往復書翰集 / [ティツィング著] ; 横山伊徳編. -- 吉川弘文館, 2005.
K30	植民地帝国日本. -- 岩波書店, 1992.11.
K31	近代性の構造 / 飯島渉, 久保亨, 村田雄二郎編. -- 東京大学出版会, 2009.
K32	植民地経済の繁栄と凋落 / 加納啓良責任編集. -- 岩波書店, 2001.12.
K33	タイ近世史研究序説 / 石井米雄著. -- 岩波書店, 1999.11.

	書名 / 著編者名等
O1	国富論 / アダム・スミス[著] ; 大河内一男監訳. -- 中央公論社, 1988.4.
O2	資本論 / カール・マルクス [著] ; マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳. -- 大月書店, 1982.10.
O3	雇用・利子および貨幣の一般理論 / J.M.ケインズ著 ; 塩野谷祐一訳. -- 普及版. -- 東洋経済新報社, 1995.
O4	自由と経済開発 / アマルティア・セン著 ; 石塚雅彦訳. -- 日本経済新聞社, 2000.
O5	第二の産業分水嶺 / マイケル・J・ピオリ, チャールズ・F・セーブル著 ; 山之内靖, 永易浩一, 石田あつみ訳. -- 筑摩書房, 1993.
O6	日本の水ビジネス = Water business / 中村吉明著. -- 東洋経済新報社, 2010.
O7	グローバル・シティ : ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む / サスキア・サッセン著 ; 大井由紀, 高橋華生子訳. -- 筑摩書房, 2008.
O8	日本近現代都市計画の展開 : 1868-2003 / 石田頼房著. -- 自治体研究社, 2004.
O9	アメリカ大都市の死と生 / ジェイン・ジェイコブズ著 ; 山形浩生訳. -- 新版. -- 鹿島出版会, 2010.
O10	グローバリゼーションとIMF・世界銀行 / 毛利良一著. -- 大月書店, 2001.2.
O11	奇跡と幻影 : 世界的危機とNICS / A. リピエッツ [著] ; 若森章孝, 井上泰夫訳. -- 新評論, 1987.11.
O12	多国籍企業と国際税制 : 海外子会社,タックス・ヘイヴン,移転価格,日米租税摩擦の研究 / 中村雅秀著. -- 東洋経済新報社, 1995.6.
O13	現代日本の中小企業 / 植田浩史著. -- 岩波書店, 2004.3.
O14	社会学 / アンソニー・ギデンズ著 ; 松尾精文 [ほか] 訳. -- 改訂新版. -- 而立書房, 1993.6.
O15	戦後日本の地域社会変動と地域社会類型 : 都道府県・市町村を単位とする統計分析を通して / 小内透著. -- 東信堂, 1996.
O16	現代と日本農村社会学 / 細谷昂著. -- 東北大学出版会, 1998.2.
O17	都市とグラスルーツ : 都市社会運動の比較文化理論 / マニュエル・カステル著 ; 吉原直樹 [ほか] 訳. -- 法政大学出版局, 1997.10.
O18	日本都市の生活変動 / 中川清著. -- 勁草書房, 2000.5.
O19	現代都市とエスニシティ : シカゴ社会学をめぐって / 秋元律郎著. -- 早稲田大学出版部, 2002.12.
O20	アジアの内発的発展 / 西川潤編 ; 西川潤 [ほか著]. -- 藤原書店, 2001.4.
O21	自然と人間の哲学 / 内山節著. -- 岩波書店, 1988.2.
O22	反貧困 :「すべり台社会」からの脱出 / 湯浅誠著. -- 岩波書店, 2008.
O23	石油を支配する者 / 瀬木耿太郎著. -- 岩波書店, 1988.6.
O24	都市と水 / 高橋裕著. -- 岩波書店, 1988.8.
O25	ドルと円 : 世界経済の新しい構造 / 宮崎義一著. -- 岩波書店, 1988.9.
O26	裏日本 : 近代日本を問いなおす / 古厩忠夫著. -- 岩波書店, 1997.9.
O27	コンクリートが危ない / 小林一輔著. -- 岩波書店, 1999.5.
O28	君たちはどう生きるか / 吉野源三郎著. -- 岩波書店, 1982.
O29	老子 / 蜂屋邦夫訳註. -- 岩波書店, 2008.
O30	孫子 / 金谷治訳注. -- 新訂. -- 岩波書店, 2000.
O31	世界憲法集 / 高橋和之編. -- 新版. -- 岩波書店, 2007.1.
O32	寺田寅彦随筆集 / 小宮豊隆編.-- 改版.-- 第1巻-- 岩波書店, 1963.4.
O33-35	戸坂潤全集 / 戸坂潤著. --第1,2,4巻-- 勁草書房, 1966.
O36	学問について / 湯川秀樹著 ; 佐藤文隆編集・解説. -- 岩波書店 1989.

（計 69 冊）

KURENAIコンテンツ紹介

学会誌と機関リポジトリの協同：大学図書館による学術出版の再生

東北大学理学研究科　**村上　祐子**
京都大学文学研究科　**神崎　宣次**

京都大学発行電子ジャーナルの一つに、オンラインのみ（E-only）出版の応用哲学会誌 *Contemporary and Applied Philosophy*（CAP）がある。応用哲学会（http://wwwsoc.nii.ac.jp/jacap/index.html）は2008年9月設立の新しい学会である。哲学と他の学問分野にまたがる学際的研究や、現代社会の諸課題に深く関わる研究を中心にすえつつ、それらの研究活動を支える現代哲学の基礎的な研究をも包摂する、広義の応用哲学の確立と発展を目指している。2009年4月に京都大学で開催された応用哲学会第一回研究大会での公開シンポジウム「これが応用哲学だ!」の講演ビデオが京都大学OCWから公開されているので、

公開シンポジウム「これが応用哲学だ!」
http://ocw.kyoto-u.ac.jp/opencourse-1/copy_of_04/090426-10

京都大学オープンコースウェア提供
http://ocw.kyoto-u.ac.jp/

応用哲学に関心のある方はそちらを観ていただきたい。なお、第三回大会が2011年4月23-24日に千葉大学で開催される予定になっている。

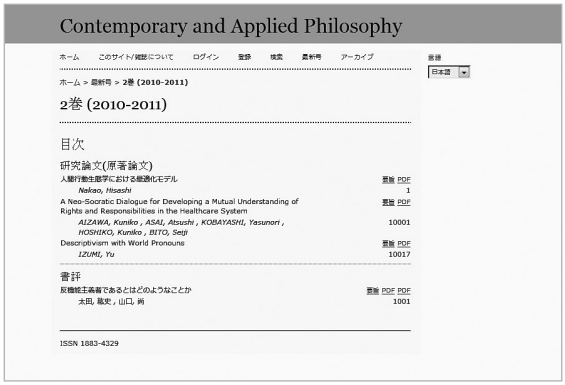
設立計画の当初から応用哲学会では学会誌の国際性・オープンアクセスを重視する方針が定められていたが、京都大学附属図書館からご協力をいただけることになり、附属図書館が運用するOpen Journal Systems(OJS)上で最初のE-only学会誌を応用哲学会で発行することになった。発行に当たってはE-onlyという特性を活かして、論文字数制限の大幅緩和と投稿時期・出版時期の柔軟化が意図された。紙幅が事実上存在しないためCAPでは字数制限は印刷費ではなく査読者負担の観点からのみ設定されている。またOJSを採用することによって論文を常時投稿可能にし、受理即査読に回し、査読通過論文は編集作業終了次第順次公開するという体制が構築できている。その他にも、哲学系国内学会としては投稿から出版までが短い、オンライン査読導入により海外の会員に査読を依頼しやすくなった、査読過程の記録が自動的にシステム上に残る、といった利点が生まれている。

学会誌をE-onlyとする選択には、印刷や編集および発送にかかるコストを見直す意図もあった。院生等の若い研究者の参加を促進するために、そうしたコストを抑えて年会費をできるだけ安くしようというのが、設立準備段階からの応用哲学会のもう一つの基本方針である。しかし、むやみにカットすることが目指されていたわけで

はない。これまで学会の事務作業は、徒弟制のもとに事務局担当研究室に所属する学生が無給で担当することも多かった。そうした「隠れたコスト」の存在を学会として認識し、労働の対価はきちんと支払いつつ会費を低く抑えることが重要なのである。E-onlyという選択はこの方針を達成するためのものでもある。

なおCAPは現在2号まで出版しているが、全く問題がなかったわけではない。OJSはアメリカで開発されたシステムを日本語に翻訳したものであり、査読依頼や査読受諾の回答などのメール・テンプレートの日本語文面には不自然なものが多い。またマニュアルのトラブルシューティングが不明確で、査読者や投稿者から編集委員長への問合せがしばしばある。以上二点で改善がなされればより多くの学術誌がOJSからの出版に関心を示すだろう。

（むらかみ　ゆうこ）
（かんざき　のぶつぐ）



Contemporary and Applied Philosophy
http://openjournals.kulib.kyoto-u.ac.jp/ojs/index.php/cap

* *

紀要・雑誌の出版プロセスをオンラインで！

Open Journal Systems (OJS)はオンラインで学術雑誌の管理・公開をおこなうことができるオープンソースの電子出版システムです。OJSを使うことで、紙媒体で発行していた学術雑誌を電子ジャーナルとして公開できるだけでなく、論文の投稿・査読プロセスなど編集にかかるプロセスをオンラインで管理することができます。ご関心のある方は、下記までお問い合わせください。

学術雑誌が電子ジャーナルに！

対象：学術雑誌・紀要発行者(研究科・研究室・学内学会など)

みなさまが発行する学術雑誌・紀要・プロシーディング等の電子ジャーナル化を支援します
冊子体からの電子化、著作権処理についてもご相談ください。

電子ジャーナル化により雑誌の読まれる機会が一気に高まります
雑誌全体で年間390,000回以上、論文単位では年間2,000回以上ダウンロードされるものがあります。(2010年実績)

KURENAIを通じて発信することで対外的なインパクトを高めます
京大発行の雑誌・紀要類90誌以上が既に公開されています。また、これまでごく一部で共有されていたゼミ論文集のような中間的な学術情報もCiNiiなどで検索可能になります。

KURENAI 紅工
京都大学学術情報リポジトリ
Kyoto University Research Information Repository

■お問い合わせ・コンテンツ送付先
附属図書館 情報管理課 電子情報掛 e-mail: dlkyoto@kulib.kyoto-u.ac.jp

図書館の動き

平成22年

11月 4日　図書館協議会（平成22年度第3回）
5日　プレゼンテーション研修
10日　国立大学図書館協会秋季理事会
附属図書館特別企画（11/10－29）
11日　国公私立大学図書館協力委員会（慶応大）
図書館システム運用協議会
16日　図書館協議会第二特別委員会
資料保存研修
19日　国大図協シンポジウム（奈良女子大）
24日　国大図協近畿地区協会事務連絡会
25日　図書系連絡会議

12月 7日　実務研修（目録）
図書館運営協議会
8日　図書館協議会第一特別委員会
古文献資料専門委員会
22日　図書系連絡会議

平成23年

1月19日　留学生利用者座談会
七大学附属図書館長等臨時懇談会
25日　機構長候補者推薦委員会
27日　図書系連絡会議

2月 2日　機構長候補者推薦委員会
4日　情報リテラシー教育・講習研究会
8日　図書館協議会第二特別委員会
図書館協議会第一特別委員会
23日　図書館機構講習会（障害者支援）
24日　図書系連絡会議

目　次

◎静脩企画　利用者座談会「留学生からみた京大図書館」…… 1
◎図書館のココを改善しました！…… 7
◎平成22年度　京都大学図書館機構　第１回講演会
「iPadが図書館を変える？」報告…… 8
◎＜大型コレクション紹介＞　中国海関档案史料の収蔵によせて……堀　和生 …… 14
◎「モモ」と「老化するお金」＜一冊の本シリーズ17＞……塩瀬　隆之 …… 16
◎地域研究統合情報センター図書室の紹介…… 18
◎国民読書年附属図書館特別企画報告…… 20
◎KURENAIコンテンツ紹介
学会誌と機関リポジトリの協同……村上　祐子・神崎　宣次 …… 22
◎図書館の動き…… 24

編集後記

今年度の静脩の特集テーマは「利用者サービス」です。第１号は利用者座談会、第２号は教員お勧めの図書館利用法、第３号（今号）では留学生利用者座談会を実施しました。留学生の生の声をお聞きするのは初めてでしたが、留学生とひとくちにいっても、国によって大学の教育環境や図書館事情が随分違うこと、それがベースとなり京大図書館への満足度も要望も様々であることもわかりました。いただいたご意見を反映しつつ、これからも静脩が利用者と図書館を結ぶ窓口として機能していくことを願っています。(n)

京都大学図書館機構報「静脩」Vol.47 No.3（通巻169号）2011年2月28日発行　編集：「静脩」編集小委員会
（責任者：附属図書館事務部長）発行：京都大学図書館機構　京都市左京区吉田本町36−1　Tel.075‐753‐2691